



# よこと館だより

特報版 3 号



Est.1912

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局

## 愛惜 児童養護施設の星 大森信也さんの死を悼む

理事長 橋本正明

社会福祉法人わかさ会の経営する児童養護施設「若草寮」園長大森信也さん(46 歳)が故無く、或いは逆恨みを受け、刺殺されました。殉職です。犯人は 4 年前に高校を終え、寮を巣立った青年(22 歳)です。

痛ましい・・・心の震えを覚えながら、衷心からの哀悼の意を表します。

児童養護施設の働きは、地域で生活をしていく上での様々な生活・養護課題を抱える児童の健全育成、養育が機能です。基本は家庭養育機能の代替といえますが、そこには児童の人権の保全、権利の保障がベースに有り、現代では特に被虐待児を守る役割が社会から期待され要請されています。ソーシャルワークの原理的な機能として極めて重要で、代表的な領域・フィールドだといえます。

今回の事件から改めて認識される事は、社会福祉援助・ソーシャルワークのもつ機能のリスクと援助の限界性です。対人援助の場において「医療」も「教育」も同様に援助に関わるリスクを抱えています。それぞれの分野で発生する傷害事件(時には今回のような殺人事件)はクライアント(利用者)からもあれば、援助者(スタッフ)からのものも有ります。その意味において援助の限界点の認識は、危険な傷害行為に対してどのようにリスクを分散し、マネジメントできるかと言う事です。これは施設においてもソーシャルワーカー個人においてもいえることです。私は「殉職」と書きましたが、それはソーシャルワーカーとしての立場と事業者としての責任を思うからです。

犯行の原因と動機についてはまだ仔細には明らかにはされていませんが、報道によると彼は 18 歳で若草寮を巣立った後、仕事を転々として経済的にも精神的にも不安定であったようです。施設(長)が保証人になって借りてくれたアパートで家賃滞納や部屋の壁を壊したり、奇声を発したりして警察沙汰も起こしていました。大家さんが退去を求めたのは当然だったでしょう。精神的に不安定だったと推測できます。その彼のアフターケアに 4 年間若草寮として誠実に取り組み、懸命に自立の支援を続けていたことが想像されます。

結局、犯人は極限的に孤独だったのだと思います。そして頼るのは社会に出るまでの 3 年間生活をした若草寮しかないことを知っていたのでしょう。しかし彼はアパートを追い出されたのは保証人になってくれている施設のせいと思い、心配する施設(職員)に「ストーカーをされていた」と供述しています。だから「施設に恨みがあった。施設の人ならだれでもよかった」と供述をしているのでしょう。まさに逆恨みです。或いは自分をよく知ってケアしてくれるのは「若草寮」しかないこと承知した上で、自分の思うようにならない怒りを若草寮に向けたのでしょう。よく未成熟な子供が、親に反抗するように。

彼は精神保健領域の支援が必要だったのだと思います。施設での生活は「ごく真面目でおとなしい人だった」と生活を共にしていた元の寮生がツイッターで語っています。厳しい現実社会での生活に適應できなく、危険な症状を発症していたのだと思います。そこにソーシャルワークの援助の限界性を思わざるを得ないので。残念ながら結果からみれば痛ましいとしか言いようがありません。

被害にあった大森信也さんは日頃から熱心な児童福祉の実践家・活動家として児童からもスタッフからも信頼の厚かった人で、現場から施設長に昇格をされた方だそうです。またその世界では大変評価が高かった人で業界の「期待の星」だったと思います。驚いたことに卒業された立教大学では体育会応援団のリーダーだったそうで、その意味では骨太の信念の人だったと推測します。

今回の事件を考えると、2016 年 7 月におきた「津久井やまゆり園事件」や、法人にとって辛い思いをした児童養護のグループホーム建設に対する住民の反対運動など、福祉施設を巡る様々な問題を思います。この事件が法人の児童養護施設の利用者や職員を不安な思いにさせていないか心が痛みます。しかし法人は常に職員の皆さんをバックアップしていきます。また法人の事業を支援してくださっている多くの方々は至誠学舎立川を信頼して下さっています。どうぞ自信を持って日々のケアに当たっていただきたいと思います。

若草寮を運営している「(社福)わかさ会」の歴史を少しご紹介しておきます。皆さんは「山田わか」という数奇な運命を生き、与謝野晶子、平塚らいてうなどと肩を並べる女性活動家で「母性主義」を標榜した社会事業家をご存知でしょうか。彼女が昭和 10 年から取り組んだ社会事業の流れを汲んだ法人です。戦

前母子寮や保育園の事業を起こし、戦後は婦人更生保護施設や未婚の母問題に取り組みました。経緯があり 1974(昭和 49)年に法人名をわかき会とし、主に高校生を対象とする児童養護施設として活動をしてきましたが、現在は通常の児童養護施設を経営することになった特異な歴史を持つ法人なのです。

今回の事件の驚きとその影響は計り知れないところがあります。しかし私達はその山と谷を乗り越え、明日に向かっていく「志」を大切に歩いていかなければなりません。多くの仲間と共に。皆さんの力強い足並みに心からの敬意を持って。

## 何かが変わってしまった 2 月 25 日

至誠学園 理事・施設長 石田芳朗

「あ、いたたた」、「いたい、いたい!」と言っている大森さんの声がなぜか聞こえてきます。それは、あくまでも先生らしく、決して慌てているような物言いでなく、いつもより少しだけボリュームが上がってはいますが、落ち着いた声で聞こえてきます。きっと切羽詰って、やっとの思いで訪ねてきた相手を歓迎し、驚かせないように配慮していたのでしょうか。凶悪な刃さえも、先生は受け入れようとしていたのでしょうか。自身の血液をもって、目の前の子どもの未来へとつづく成長に願いと希望をつなごうとしていたのでしょうか。

報道が入り乱れるなか、犯行時の様子を記述した記事にそんな表現があったような気がします。もちろん、実際に聞いたわけではありません。誰かの書いた記事と私に残る先生の声の記憶が融合し創造されているに過ぎないことは、わかっているつもりです。しかしながら、声は聞こえ、その場所、場面もリアルに迫ってくるのです。

消化できていないものが、幾日も胃の中に滞留しているような。それどころか、あふれ出さんばかりに、時に沸々と湧き上がり、喉元まで熱く焼かれるかのような感覚を覚えます。正直、苦しく、息が詰まるような体感です。さらに脳は無意識下で感覚を鈍くさせているのでしょうか。感じないように、敏感にならないように、何かに取り組んでいてもフリーズしているかのような感じです。

ネット上の報道動画に映し出された容疑者の、まだ子どもとしての面影も残る顔に、別の知っている顔がいくつも重なります。そのたびに慌てて打ち消す自分。私たちは紙一重のところで何とか帳尻を合わせながら、今ここにたっているという認識とともに、彼の場合と何が違うのか、何も違わないのかと、ぐるぐると切ない思いが逡巡します。

それでも、悔やんでも悔やみきれないであろう彼の思いを、物腰は穏やかで静かながら強い信念に裏打ちされた言葉を、もし、今一度聞くことができるならば、私達に何を語ってくれるのだろうか、と考えずにはられません。

叶うならば、「こんな時だからこそ、決してひるまないでください」、と言って欲しい。「私たちの取り組んできたこと、取り組もうとしていたこと、方針や志(こころざし)に間違いは無いから」、と言って欲しい。(きっと、そうしてくれるだろうと思います。)

特に退園生への支援(アフターケア)にマイナスの影響がでることをとりわけ危惧されるに違いありません。「私のことでこれまでの歩みを止めないで欲しい」と、謙虚な姿勢で、でも力強く言ってくれるのではないかと思います。

私たちは、先生の無念さはもちろんのこと、卑劣な犯行に及んでしまった容疑者の置かれた状況や境遇、歩んできた道のり、そして対象としての施設の意味についても想像力をはたらかせてしまい、そこにある種の理解をもってしまうことに本当の苦しみの根源があるように思います。暴力によって表現されることは断固として認められませんが、結果として誰も何も救われない状況に空しさや無念さだけが後を引きまします。言うなれば、児童福祉援助の限界をつきつけられているかのようです。

そして、今後、社会的養護の経験者への偏見が生じてくるのではないかという心配も絶えません。後ろ盾の少ない者への容赦ない姿なき攻撃は、社会に深く潜行して新たな価値として根付いてしまうことにはならないか、彼らを守るために注視と積極的な啓発等の活動がさらに求められるようになるかもしれません。

日々の支援とその先に永く繋がるアフターケアに深く係わる職員にとって、少なからず不安や迷いの感情が生まれてくることは当然のことでしょう。犯行に及んでしまった容疑者の心理はこれから明らかにされていくことと思います。何が彼を犯行へと導いてしまったのか、私たちは冷静な頭を準備して深層に臨む必要があります。そして、真実を受け入れつつも、考えること、思うこと、感ずることを言葉にして仲間と語ることが第一歩ではないかと思っています。不安や苦しみの感情を吐露できて、受けとめてもらうことのできる仲間とともに語り合うことで、私たちは支援者としての次への一歩が見え、踏み出していけるような気がいたします。

どうか皆さん、自分だけでわかったふりをしないでください。感じたこと、考えたことをシェアしましょう。これから先、明確な答えの出ない問題かもしれませんが、永く立ち向かっていかなければならない問題かもしれませんが、だからこそ、お互いの気持ちを理解し、地に足をつけて、ともに考えていきましょう。もう少し苦しい日々が続くかもしれませんが、どうか力をあわせて。よろしくお願ひいたします。

あらためて大森先生に哀悼の意を表すとともに、ご家族の皆様、若草寮の子ども、職員の皆様のもとに平穏無事な日々が一日も早く訪れますことを心より切に願っています。

合掌